

2023年度 一般社団法人日本社会福祉学会 学会賞受賞に寄せて

学会賞審査委員会による審査の結果、2023年度の学会賞が決定し、学術賞（単著部門）として林健太郎会員が、奨励賞（単著部門）として大澤亜里会員ならびに天畠大輔会員が選ばれました。

授賞式は、第71回秋季大会一日目の2023年10月14日（土）に武蔵野大学武蔵野キャンパス雪頂講堂において、開会式に引き続いて行われました。

受賞された方々からの喜びの声をお届けします。



保正副会長 杉山委員 山縣委員 細井委員 森田委員 黒木委員長 林会員 大澤会員 天畠会員 空閑会長

◆ 学術賞（単著部門） 林 健太郎（慶應義塾大学産業研究所）

受賞作：『所得保障法制成立史論

——イギリスにおける「生活保障システム」の形成と法の役割』

（信山社、2022年3月30日刊）



この度は拙著『所得保障法制成立史論』に関して、学会学術賞という大変栄誉ある賞を賜り、ただただ恐縮しております。審査の労をお取り頂いた審査委員会の先生方には、審査のために貴重な時間を費やして頂き、感謝の念に堪えません。改めて御礼を申し上げます。

本書は、イギリスの14世紀から20世紀前半に至る長期の歴史過程について、『成立史「論」』と銘打っているように、一定の問題意識とそれに基づく

分析枠組みに即して分析を試みたものです。ここでいう問題意識とは「労働」、つまり働いて生活を成り立たせるということと、「社会保障」、すなわち歴史的に言えば、共同社会における構成員が共同して構成員の生活を支援する仕組みとの組み合わせの仕方が、長期の歴史の中でどのように仕組みられていったのか、かかる組み合わせを成り立たせていた「法」の役割がいかなるものであったのか、というものです。そして、この問題意識・分析枠組みは、現代における問題意識、すなわちワーキングプアのような働くことのみによっては生活を安定させることができず、しかし就労を条件としたものが多い社会保障制度はこのような現実に有効に対応することが出来ていないという問題をどのように考えればよいのか、という問いから導かれたものでした。本書を纏めるにあたって苦労した（時間をかけた）ことの一つ目は、この現代に対する問題意識を歴史研究上の問題意識・分析枠組みとしてどう構成すべきか、ということでした。そして、歴史研究としての分析枠組みが明確になった後、膨大な史資料を解読し整理する作業が二つ目に苦労した点です。これらの点に関して、今回授賞に当たっての審査委員会の「講評」において「分析視角に独自性がある」、「資料の取り扱いの丁寧さとそこから導き出される評価等は的確かつ精緻」と評価して頂けたことは、ここでの苦労を思い出しつつ、率直に嬉しく思いました。

他方で、同じく「講評」でご指摘頂いているように、「社会福祉の領域でこれをどう生かしていくのか」という点が（それだけではありませんが）問われるところであることは自覚しています。本書の問題認識を改めて振り返ると、私の関心は要するに、法制度と人々の生活との間にあるズレをどのように考えるか、というところにあります。法制度は一定の人間像、あるいは生活像を前提に構築され、ひとたび制度が確立・安定すると、今度は法制度が人間ないし生活のあり方を規定する側面があります。また、法制度は、あらゆる生の事実を全て反映することはできず、法令の要件等を通じて、いわば「法的事実」の枠の中に現実・現実の生活を押し込んでしまいます。本書における分析もこの問題意識が常に念頭にありました。こうした法と事実の乖離や緊張関係をどのように受け止め、ここから生じる不利益が人々の生活に一方的な悪影響を与えないようにするにはどうしたら良いのか。これは本書に限らず、人々の生活に密接に関わるあらゆる社会保障・社会福祉に関する法制度の検討にも通ずると考えています。本書との関係というわけではありませんが、こうした問題意識を持ちつつ、法学研究者の立場から、これから学界の発展に微力ながら力を尽くしたいと思っています。

◆ 奨励賞(単著部門) 大澤 亜里(札幌大谷大学短期大学部)

受賞作:『ヤヌシュ・コルチャックの教育実践



——子どもの権利を保障する施設養育の模索』

(六花出版、2022年2月1日刊)

この度は奨励賞という栄誉ある賞を受賞することができ、心よりうれしく思います。審査委員会の先生方、また出版に際して大変お世話になった六花出版の皆様にお礼を申し上げます。

拙著は、1989年に国連で採択された子どもの権利条約に影響を与えたとされているポーランドの教育者でありユダヤ人のヤヌシュ・コルチャックが院長を務めた孤児院における教育実践を歴史的かつ具体的に明らかにし、彼の思想の形成・深化の過程について検討したもので、2018年9月に北海道大学大学院教育学院に提出した博士論文がもとになっています。

ポーランドに留学し、ワルシャワ大学で修士論文を執筆し、北大で博士論文を提出するまでの13年間、日本およびポーランドのコルチャック研究者、ご指導くださった先生方、知人、友人など多くの方に支えられて研究を継続することができました。私の研究を支え、応援してくださった方々への感謝の気持ちで一杯です。

ヤヌシュ・コルチャックは、これまで教育の分野で取り上げられていた人物ですが、ユダヤ人差別や戦争の中で、孤児や貧困家庭の子どもたちとともに生活をし、その中で子どもの権利保障について考えていたことを踏まえると、やはり社会福祉、児童福祉の中で取り上げて議論したいと考えていました。また、コルチャックの功績というよりも、彼の実践を可能にした孤児救済協会という団体に着目すること、彼と共に実践をした職員や子どもたちの記録にも着目すること、そして当時のポーランドの児童保護の状況を把握し、その中に彼の実践を位置づけることを大事にしてきました。不十分な点や課題を多く残したまま、思い切って出版しましたが、この度、教育の分野ではなく、社会福祉学会で評価していただいたことを何よりうれしく思います。

個人的な関心から始めたコルチャック研究ではありますが、日本に帰国し、北大の博士課程に進んでからは、現在の日本の子どもをとりまく問題と向き合うために研究をしなければ、という思いをずっと持ち続けています。今後はこれまでの研究を土台にしながら、すべての子どもが一人の人間として尊重され、自分の人生の主人公として生きていける社会になることを目指して、研究に教育に励んでいきたいと考えております。

◆ 奨励賞(単著部門) 天島 大輔(一般社団法人わをん)

受賞作:『しゃべれない生き方とは何か』

(生活書院、2022年2月25日刊)



この度は奨励賞に選んでいただき、誠にありがとうございます。この論文の執筆にあたって、お礼をお伝えしたい方は数え切れないほどいますが、恩師立岩真也先生に改めて感謝を伝えたいと思います。

手も足も口も、自由に動かすことの出来ない私が、「ライフワークとしてできるのは研究しかない!」と思い立ったとき、大学院の門戸を開いてくれたのは立命館大学の立岩先生でした。前例がないほどの重度障がいの人に、「ついに来たか」と声を掛けてくれました。研究に挑戦するチャンスを与えてくれた立岩先生がいなければ、今日私はここにいません。

信じられないことに、立岩先生は本年2023年7月に急逝されました。奨励賞受賞の知らせを受けたのはその翌日のことでした。葬儀において棺の中の先生に報告できたことは、深い悲しみの中で少し心の救いとなりました。

本書、『しゃべれない生き方とは何か』は、私の博士論文をもとに執筆しています。この論文執筆は私にとって、「当事者性」を獲得していく過程そのものでした。私はそれまで、14歳で中途障がいになってから、自分の障がいを心から受け入れられたことはありませんでした。自分ではできないから人に助けてもらわないと生きていない、弱い存在—。それが重度身体障がい者である自分だと捉えていました。

しかし、研究を続けていく中で、その考えが徐々に変わっていきました。自分が先行研究から様々な気づきを得たように、私の研究が他の誰かの生きやすさのヒントになっていくかもしれないと—。

そして、自分は自分の困難、障がいについて社会に声を届けることが出来る存在なんだと、感じるようになったとき、無力な存在だと思っていた重度障がい者の自分へのラベルを張り直すことが出来たのです。言いかえると、論文執筆の過程は自分に誇りを取り戻す作業であったとも言えます。

今も声をあげることができない、社会で生きづらさを抱える人はたくさんいます。その方たちに少しでも影響を与えられるような研究、活動を今後も続けていきたいと思っています。なお本書は、日本学術振興会の研究成果公開促進費や、科研費の若手研究の助成を受けたものです。今回の受賞と併せて、今後の研究活動の励みになったことに、感謝申し上げます。